

子・ねずみ・鼠

今年の干支ねずみの本を紹介します

「鹿男あをによし」

万城目学著 幻冬舎 2007年

(F/マ131/2)

~鹿と狐とネズミの三つ巴~

ある失敗のため所属していた大学の研究室に居場所がなくなった28歳の「おれ」は、二学期だけという約束で、奈良の女子高で教師をする破目になりました。その学校で堀田イトという反抗的な生徒に出会い、大仏殿の原っぱで人間の言葉をしゃべる鹿に出会ったことから、「おれ」は世にも不思議な出来事に巻き込まれていきます。

この物語では鹿と狐、そしてネズミが重要な役割を演じます。さてその役割とは？



「NO. 6 (ナンバーシックス)」1~6 (刊行中)

あさのあつこ著 講談社 2003年~

(F/ア195/5-1)

~「ネズミだもの。夜行性に決まってる。」~

台風がやってきた12歳の誕生日の夜、得体の知れない感情の高ぶりを覚え、窓をあけ意味のない大声をはりあげていた紫苑は、突然部屋に侵入してきた「ネズミ」と名乗るケガをした不思議な少年と出会います。この時から、幼児検診の時、知能面で最高ランクと認定され、超エリートとして最高の教育を受けてきた紫苑の人生が変わり始めます……。

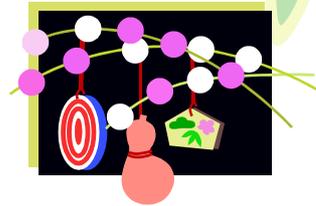
理想都市「NO.6」を舞台に繰り広げられる近未来の物語です。

「川の光」

松浦寿輝著 中央公論新社 2007年
(F/マ97/6)

～川のネズミは上流を目指す～

ネズミの一家、タータとチッチ兄弟とお父さんはとある川のほとりの巣穴で、平穩に暮らしていました。しかし、ある時人間が川を暗渠にする工事を始め、タータたちは住み慣れた場所を追われることとなります。川に生きるネズミとしての誇りを持ったお父さんは、新たな居場所を求めて、川を遡ることに決めました。ここから、タータとチッチたちの大冒険が始まります。どんな冒険が待っているかは、読んでのお楽しみです！

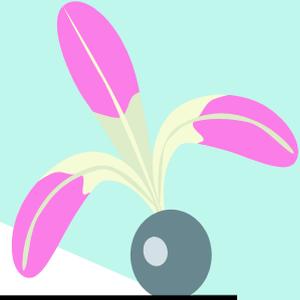


くらやみ城の冒険 (ミス・ピアンカシリーズ (1))
マージェリー・シャープ作 渡辺茂男訳 ガース・ウィリアムズ絵 岩波書店 1987年
(930/シヤフ/)

～はたしてノルウェイ詩人を助け出せるのか～

囚人友の会を主宰するねずみたちの会議で、最悪の牢獄「くらやみ城」に投獄されたノルウェイ詩人を救い出すことが決定されました。救出の大役を仰せつかったのは、ミス・ピアンカとバーナード。2匹にノルウェイねずみニルスが加わって大冒険のはじまりはじまり。果たしてねずみたちは、ノルウェイ詩人を救い出すことができるのでしょうか...？





フレデリック ~ちょっとかわったねずみのはなし~

レオ・レオニ 作 谷川俊太郎 訳 好学社 1969年
(E/F/)

~フレデリックが集めたものは~

石垣のすきまに住んでいるのは5匹のねずみたち。冬に備えて、一生懸命に食べ物を集めています。でも、フレデリックが集めたものはちょっとだけ違っていました。

そして、冬になって、食べるものがなくなったそのとき、フレデリックは...

ねずみ女房

ルーマー・ゴッデン作 石井桃子訳 福音館書店 1951年
(930/コツテ/)

~外の世界にあこがれて~

ある日、食料をさがしに出かけたねずみの女房は、鳥籠に入れられたハトを見つけます。食べることをしないハトのえさをもらいに行くうち、彼女はハトと言葉を交わすようになります。ハトは空を飛ぶこと、風のことなど外の世界のことを、彼女に話してくれます。彼女は自分がこれまで得られなかったものが何だったのか理解します。でも、どんどん弱っていくハトを見かねた彼女は籠の扉を開けてやります。それが外の世界を知るチャンスを失うことだと分かっているながら。飛び去るハトを見送るとき、彼女は窓から初めて、自分で空をみたのです。

